

日本農学図書館協議会誌 168号 (2012年12月)

目次

農研機構における国産食材開発の取組について

笹倉 修司…………… 1-6

ヘルシンキでの国際図書館連盟 (IFLA) 総会とサテライト会議に参加して

長塚 隆…………… 7-10

《いまどきデータベース》

花き病害の診断防除データベース (花き病害図鑑)

築尾 嘉章…………… 11-14

【シリーズ 図書館を支援する私の会社】

コンテンツソリューション：サンメディア 48年の歩みとサービスのご紹介

松下 茂…………… 15-17

【農学系図書館探訪】

(独)農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所図書館…………… 18-20

事務局報告…………… 21

・平成24年度第3回理事会議事録

・主な取組み

Bulletin of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

No.168

December, 2012

ISSN 1342-1905

CONTENTS

Development of domestic foodstuff by NARO

Syuji SASAKURA 1 – 6

An Introduction to the World Library and Information Congress (IFLA 2012)
and the Satellite Meetings

Takashi NAGATSUKA 7 – 10

《An Introduction to New Database》

Web site “A Pictorial guide for flower diseases in Japan”

Yoshiaki CHIKUO 11 – 14

【Your company’s corporate philosophy and library】

Content Solutions : The 48 years history of Sunmedia and our products

Shigeru MATSUSHITA 15 – 17

【Visit to Agricultural Library】

NARO Institute of Fruit Tree Science Library 18 – 20

Note from JAALD 21

農研機構における国産食材開発の取組について

Development of domestic foodstuff by NARO

笹倉 修司*

1. はじめに

農研機構（正式には独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構）は研究者数 1600 名余を擁する日本で最大の農業・食品に関する試験研究機関である。14 の内部研究所において、農業生産の基盤から食品に関する研究まで、極めて幅広い分野で研究を進めている。

農研機構は平成 23 年度から第 3 期中期計画（5 カ年）に基づき、以下の大きな柱を立てて研究を進めている。

- ①食料の安定供給のための研究－第 2 の緑の革命、食の安全確保と持続的農業－
- ②地球規模の課題に対応する研究－地球温暖化への対応と循環型社会の形成－
- ③新需要創出のための研究－農畜産物・食品の高付加価値化と農業の 6 次産業化－
- ④地域資源の活用のための研究－被災地域の農業・農村の復興と国土資源の保全－
- ⑤原発自己対応のための研究－農業復興、営農再開と安全な農畜産物の生産－
- ⑥農業機械化の促進に関する研究－農業現場を支える革新的な機械開発－

このように幅広い研究の中から、本稿では、新たな需要の創出等をもたらす国産食材の開発研究の取組について、その核となる品種を中心にしつつ紹介したい。

2. 「食」を巡る流れと近年の特徴

国産食材開発の取組を紹介する前に、第二次世界大戦以降の日本における「食」を巡る流れと近年の状況、特



写真 1 世界で最も多く栽培されているリンゴ「ふじ」の果実と品種の原木

徴について若干触れておきたい。

第二次世界大戦後の食糧難時代、「食」の最も重要な目的は「ともかくお腹を満たすこと」であった。研究開発も、いかに多くの収量を安定して得るかを最重点課題として取り組んできた。多収品種の育成を始め、多収をめざす栽培技術の開発、効率的・効果的な施肥法の開発、病虫害防除技術の開発等である。

ようやく空腹から脱却できた 1970 年代以降、「食」への欲求は「おいしいものが食べたい」へと変化する。現在、世界で最も多く生産されているリンゴ「ふじ」が、それまでの「国光」や「紅玉」に代わって収穫量日本一となるのが 1975 年、水稻「コシヒカリ」の作付面積が日本一となるのが 1979 年である。また、それまでは練乳等をかけて食べていたイチゴを、そのまま食べるきっかけとなった「とよのか」や「女峰」が登場したのが 1984 年、1985 年である（写真 1）。

図 1 に 1960 年から半世紀の間の作物別作付面積構成の推移を示した。1960 年頃は穀類等「お腹を満たす」作物が約 3/4 を占めていたが、その後野菜や果樹の割合が高まり、また、肉食の増加に対応して飼料作物が増

* 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 連携普及部 統括コーディネーター 〒305-8517 茨城県つくば市観音台 3-1-1 Suji SASAKURA National Agriculture and Food Research Organization 3-1-1 Kannondai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8517 Japan.

加、2010年には穀類等の割合は5割程度まで低下している（図1）。

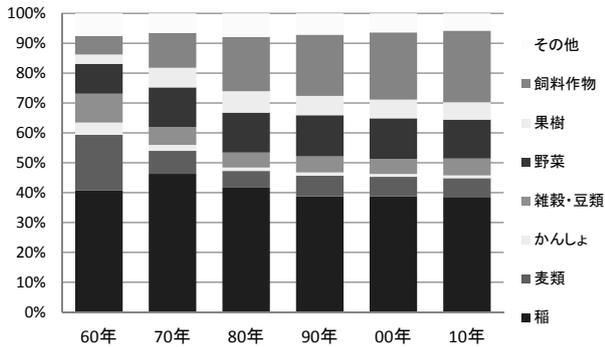


図1 作付面積構成の推移

元号が平成となったあたりから「食」に求めるものはまた変化する。「食べて健康になりたい」、「安全・安心なものが食べたい」、「簡単に食べられるのがいい」、「今までと違う新しいものが欲しい」等である。こうした「食」への欲求の変化に対応し、おいしさを大前提としつつ、①健康機能性成分が多い、②農薬等の散布を減らせる、③簡単に食べられる、④新たな食品加工ができたり、新たな香りがする、等の新たな価値を有する品種が登場してきた。また、「安全・安心」の前提として、新たな国産食材の開発も進められてきている。そこで、以下ではそうした新たな欲求に対応した、農研機構における近年の国産食材開発の取組を紹介することとする。

3. 農研機構における国産食材の開発と新品种

1) 健康機能性成分を多く含む品種とその利用

多くの方々に知られているのはアントシアニンを多く含むさつまいも、いわゆる紫さつまいもであろう。飲料、菓子類、酒類等極めて多くの商品に利用されているが、その嚙矢となったのが品種「アヤムラサキ」（1999年）である。その後、色価（色の濃さ）や多様な用途への適性等の改良が加えられた品種が続々と登場している。主な利用場面の1つが天然色素（着色料）である。それまで赤色系の天然色素の大半は赤（紫）キャベツから抽出していたが、光や熱に対する安定性が高い紫さつまいも色素の利用が増加し、現在はほぼ拮抗するまでになっている。読者も紫さつまいも色素で着色された清涼飲料水を、それと知らずに召し上がっているかもしれない。

また、抗アレルギー作用を有するメチル化カテキンを多く含む茶品種「べにふうき」についても、ご存知の方が多くいるのではないかと。元々、紅茶用として育成された品種であるが、緑茶にするとメチル化カテキンが多く

含まれ、それが抗アレルギー作用を有することを突き止めたことから、飲料その他多くの商品に利用されるようになった。

以上の2つの健康機能性成分に関する研究開発については、農研機構のホームページに開発レポートとして掲載しているので、ご興味のある方はご覧頂きたい。

http://www.naro.affrc.go.jp/collab/cllab_report/index.html

その他にも多様な機能性成分について、これを多く含む品種が次々に生まれている。例えば、抗酸化機能を有するセサミン、セサモリン等のリグナン類を多く含むゴマ、やはり抗酸化機能を有するケルセチンを多く含むタマネギ、抗酸化機能を有し黄斑変性を予防するルテインを多く含むさつまいも、発ガン抑制機能を有するオーラブテンを多く含むカンキツ等々である。この中から、食物繊維のひとつであるβ-グルカンを多く含む大麦と、β-クリプトキサンチンを多く含む温州ミカンについて若干触れておきたい（写真2）。



写真2 リグナン類を多く含むゴマ。左から「ごまぞう」「まるえもん」「まるひめ」

β-グルカンはコレステロール低減効果や血糖値上昇抑制効果がヒトレベルで実証された食物繊維であり、米国ではヘルスクレーム（健康強調表示）が認められている。他の作物に比べて大麦には比較的多く含まれているが、従来のも大麦品種よりさらに2～3倍も多く含まれるのが品種「ビューファイバー」（2010年）である。これまで大麦と言えば「麦飯」等主食での利用が中心であったが、β-グルカンが穀粒の内部に多く含まれるため、精麦し粉として様々な加工食品に加えることで効果的に摂取することができる。既にパンやシフォンケーキ等の商品開発も進みつつあるが、さらなる展開が期待されている。

β-クリプトキサンチンには多くの疫学調査から、ガン抑制その他の効果が認められており、日本でも温州ミカンを多く摂食すると様々な疾病リスクを抑制することがわかっている。このβ-クリプトキサンチンを多く含むのが品種「たまみ」（2005年）や品種「西南のひかり」（2007年）である。現在、医農連携プロジェクトにおいてヒトを介したメカニズム解明が進められてお

り、その成果により、新たな商品開発の可能性が高まるとともに、減少傾向にある温州ミカンの生果の消費拡大にもつながることが期待される（写真3）。

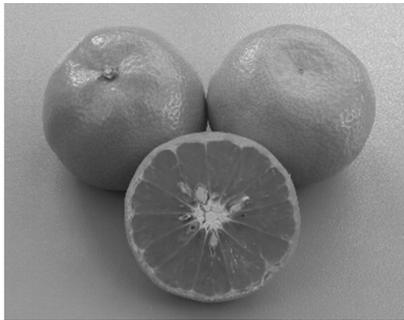


写真3 βクリプトキサンチンが多いミカン「たまみ」

2) 安全・安心な国産食材開発の取組

ご存知のように、麦類の自給率は極めて低い。小麦の場合、全体の自給率は10%前後、このうち日本麺（うどん等）用の自給率は6割程度あるのに対して、パン用は3%程度と推計されている。1%にも満たない年もあったことからすれば、若干ではあるが上向きの傾向にはあるものの、極めて低い状況にあることに変わりはない。うどん等の日本麺は中力粉が適しているが、パン用はもっとタンパク質、特にグルテンの含有量が多い小麦が必要である。なんとか国産小麦100%のパンを作れるようにしたい、ということでタンパク含量が高い品種の育成が進められてきた。

その中で特に紹介したいのが品種「ゆめちから」（2008年）である。「ゆめちから」は強力粉よりさらにタンパク含量が高い超強力粉ができる品種である。超強力粉はパスタ等に向いていて「ゆめちから」も同様であるが、中力粉とブレンドするととてもおいしいパンができるという特長を持っている。つまり、日本でたくさん作られている中力の小麦粉も使用してより多くの国産100%パンの製造が可能になるのである。この点に着目し、2012年6月限定ではあるが、大手のパン製造企業が北海道産の「ゆめちから」と国産小麦の中力粉をブレンドしたパンを製造販売した。今秋、北海道を中心に大幅な作付面積の増加が見込まれている。皆様の食卓に極く普通に国産100%のパンが並ぶ日が近づいている。

安全・安心と直接には連動しないが、やはり農薬等の散布回数が少ない食材への要望は強い。病虫害の防除（農薬等の散布）を減らす最も主となる方法が抵抗性（病気や虫に強い性質）品種の育成である。作物生産にとって

病虫害は大きな問題であり、発生すると収穫量の減少や品質の低下等生産の不安定化につながるため、農研機構は、様々な作物について、従来から抵抗性品種の育成に取り組んできたが、ここでは最近育成された2つの野菜の品種を紹介する。

ハクサイの生産にとって極めて大きな問題が根こぶ病と黄化病等の病害である。ハクサイ品種「あきめき」（2011年）は、根こぶ病抵抗性の目印となる遺伝子（DNAマーカー）によって選抜し育成した品種である。色が鮮やかで食味も良いことから、秋冬期ハクサイの最大の産地である茨城等で普及し始めている（写真4）。

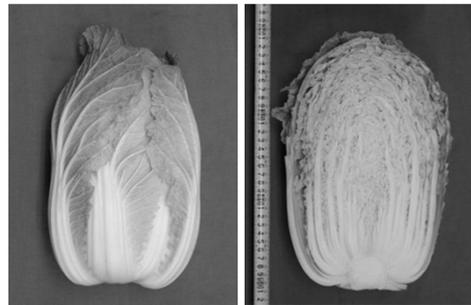


写真4 病害に強くおいしいハクサイ「あきめき」

レタスの病気であるレタスビッグベイン病は、発病すると葉脈が退色し太くなったように見えるためその名前が付いているが、商品価値が下がり、結球しない、小玉になる等多数の問題が生じる。そこで、高品質の品種と抵抗性の品種を交配して育成したのが品種「ウインターパワー」（2012年）である。ビッグベイン病の発生が厳冬期からさらに早まる傾向にあり、年内収穫が可能な当該品種がレタス産地の安定生産につながると期待されている。

3) 簡便に食べられる品種

「食」へのこだわりが高まる一方、女性の社会進出等もあり、外食・中食の増加が顕著である。こうした時代背景の下、切らずに食べられる、皮を剥かずに食べられる、といった簡便な品種への要望が強い。ここでは、おいしくてかつ簡便に食べられる果樹の2品種を紹介しよう。

ブドウは種があるからいや、皮を出すのが面倒、皮に果肉がくっついてうまく食べられない、だからブドウは敬遠したい。これらの問題を一挙に解決したのが、大粒で皮ごと食べられ、種なし栽培もできる品種「シャインマスカット」（2004年）である。マスカット特有の香りも十分ある。果樹は結実までに時間がかかるため、近年、

ようやく本格的に市場に出回るようになったが、たちまち注目の的となり、2011年度の売れ筋果物No.1に輝き高値で取引されるなど極めて評判が高い(写真5)。



写真5 種なしで皮ごと食べられる「シャインマスカット」

クリはおいしいけど鬼皮を剥いて、さらに渋皮も剥かないと食べられない。天津甘栗みたいにパコッと割れて食べられたらいいのに。そこで育成されたのが、中国グリのように渋皮までとれる性質を持ちつつ、中国グリにはない大粒でホクホクしたおいしさを持った品種「ぼろたん」(2006年)である。こちらも2011年秋からようやく市場に出回り始めたところであるが、早速NHKが朝の番組で特集を組むなど注目を集めている。今秋は本格的に市場に出回ると予想されるので、さらに評判になることが期待される(写真6)。

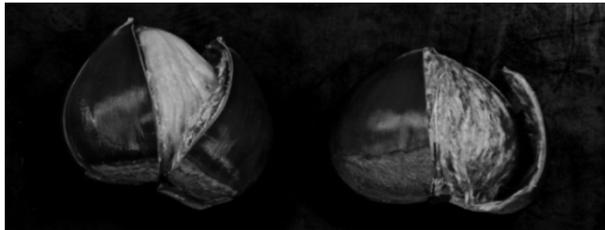


写真6 渋皮まで剥けるクリ「ぼろたん」(左)と通常のニホングリ「筑波」

簡便に食べられる、とは若干異なるが、買い物の時に持ち運びやすいコンパクトなネギ品種について少し触れたい。白い部分(葉鞘)を食べる長ネギ、いわゆる根深ネギは、緑の部分(葉身)まで含めると長すぎるし、葉身部は辛く硬く食べにくいので、全体で約60cm(葉鞘部は約30cm)に切断して流通している。それでも買い物袋から顔を出してしまうし冷蔵庫にも収まりにくい。

そこで、葉鞘部が20cm程度のコンパクトなネギ品種「ふゆわらべ」(2009年)を育成した。「ふゆわらべ」は葉身部分も軟らかくて辛みが少ないため、全体を食べる

ことができる。ただし冬季の収穫に適していたことから、夏季収穫も可能にしたのが「ゆめわらべ」(2012年)である。これで夏から冬までコンパクトでおいしい「わらべ」シリーズを楽しむことができるようになった。

4) 新しい加工用途を切り開く国産食材開発の取組
米は「ご飯」で食べるもの。そういう常識を覆し、粉にしてパンや麺への加工利用に適する品種が続々登場している。

ご存知の方も多いと思うが、米のデンプンにはアミロースとアミロペクチンがあり、前者が多いと粘りが少なく、後者が多いと粘りが強くなる。通常のご飯であれば、やや低アミロースのほうが粘りが強くておいしいのであるが、米麺に加工する場合は高アミロースの米が向いている。粘りがあると麺同士がくっついてしまい、ツルツルといかなくなってしまうからである。高アミロースで米粉麺加工に向くのが品種「越のかおり」(2008年)である。既に食品企業により「越のかおり」の米麺の他、米パスタといった商品も開発されている(写真7)。



越のかおり コシヒカリ

写真7 米粉麺に向く「越のかおり」

米粉をパンにする場合、低アミロースの品種だと柔らかくなりすぎて形が崩れる(腰折れ状態になる)。一方、高アミロースでは形はできるが硬くボソボソとなる。そのため、中アミロースの品種が向いている。パン加工に向く品種「ミズホチカラ」は、既に熊本の製粉メーカーがパン用の米粉として市販するまでになっており、これを用いると、ホームベーカリーでもおいしいパンが焼ける。家庭での手作りで国産の米粉パンができるのである。

なお、米については、これら以外にも多くの特徴的な品種が生まれている。最新の品種情報を掲載した「新しい米を創る2012」が発行されており、下記URLから入手できるので一度ご覧頂きたい。

http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/kind-pamph/030484.html

わらび餅が何から作られているかご存知だろうか。もちろんわらび粉であるが、国産わらび粉は極めて希少で高価なため、輸入わらび粉を使ったり、タピオカ澱粉、甘藷澱粉で代替しているのが現実である。しかし甘藷澱粉は餅（澱粉が糊化＝ゲル化した状態）になってから日持ちがしない（水が出て型くずれする）という問題があった。そこで、ゲルが長持ちする（老化しにくい）澱粉ができる品種として登場したさつまいもが品種「こなみずき」（2010年）である。「こなみずき」の澱粉には、その他にも低温糊化性（低い温度でゲル化する）、高消化性（酵素により早く甘くなる）といった特徴もある。これまで甘藷澱粉は主に糖（異性化糖）の原料として利用されていたが、「こなみずき」の登場で新しい加工食品への用途開発が進むものと思われる。

5) 今までできなかった時期、地域での生産により6次産業化を進める取組

蕎麦が最も多く食べられるのは12月。そう、年越し蕎麦である。しかし、それ以外の月を見ると、むしろ、7月、8月など夏季の消費が多い。暑いときにはザル蕎麦がいい、のである。ところが、日本のソバ生産における収穫時期は秋、つまり夏にザル蕎麦を食べようとする、前年秋に収穫された国産ものか、南半球から輸入された新ソバということになる。なんとか国産の新ソバでザル蕎麦が食べられないのか。

そうした要望に応えたのが、春まきで初夏に収穫できる品種「春のいぶき」（2008年）である。秋に収穫する品種を春に播いてもうまく稔らなかったり、梅雨に遭遇して品質が低下したりするが、「春のいぶき」は長日（日が長くなる時期）下でも稔実し、品質低下を引き起こさない。この品種に早くから着目した大分県豊後高田市は、積極的に導入・拡大を図り、白い花が咲き揃う5月に「日



写真8 夏に新蕎麦が食べられる「春のいぶき」の丸抜き粒と開花の様子

本一早いそば祭り」を開催、夏には市内で新ソバを提供する等、観光資源としても活用し、まさに6次産業化の核となっている（写真8）。

今までにない時期に収穫できる品種に続いて、今までできなかった地域でも栽培できる品種を紹介しよう。さとうきび品種「黒海道」（2011年）である。現在鹿児島県や沖縄県で生産されているさとうきび品種を、九州本土や本州で栽培しても、糖度が十分に高くならずおいしい黒砂糖を作るのは難しい。「黒海道」は霜が降りる前までに十分な糖度が得られ、おいしい黒砂糖ができるという特徴を持つため、九州や四国、近畿、東海等の太平洋側での栽培も可能と考えられる。絞汁から作られる黒砂糖は香り、色等にも優れていることから、地域特産的な位置づけによる6次産業化等を通じた地域活性化に貢献できる。

6) 今までにない色、香りで食卓を演出できる国産食材開発の取組

食卓の彩り、「色」は食卓の豊かさを演出する上で重要な要素である。かつて紫の食品は売れないという常識を覆しブームとなったのが、健康機能性の項で紹介した紫さつまいもである。このように多彩な色で新たな食材として展開しようとする取組はじゃがいもでも進んでいる。「カラフルポテト」と呼ばれる品種群で、ピンク色の「ノーザンルビー」（2006年）、紫色の「シャドークイーン」（2006年）、黄色の「インカのひとみ」（2006年）等がある。赤や紫はアントシアニン、黄色はカロチノイド系の成分によるものであり、従って健康機能性成分も多いが、色を活かして今までにないカラフルなポテトサラダ等ができ、また、フライにした商品も市販されている。それだけではなく、カットやダイスにして冷凍された一次加工品も流通しており、家庭でも手軽に使える食材となっている（写真9）。



写真9 カラフルポテト
左から「ノーザンルビー」「シャドークイーン」「インカのひとみ」

「色」を楽しむという点で紹介したいのが赤い梅酒ができる品種「露茜」（2008年）である。「露茜」はスモモとウメとの交配で生まれた品種で果肉まで赤い。この



写真10 色も楽しめる「露茜」の果実と梅酒

ため、「露茜」で作る梅酒はととも色鮮やかな赤色となる。茨城等で栽培しており、ようやく結実し始めた。女性に人気の梅酒も色自体は地味だった。これがおしゃれな飲み物になる日も近い（写真10）。

「色」に次いで特徴的な「香り」を持つ品種を紹介しよう。現代人は「香り」に対して敏感であり、食卓の豊かさを演出する上でも重要な要素となり得る。そこで登場するのが、モモの香りがするイチゴ品種「桃薫」（2010年）である。鼻を近づけて、その意外性に驚かされる。まだ広くは流通していないのでなかなかお目にかかれないうかと思うが、果実の皮色も薄いピンクであるため、普通のイチゴ品種と組合せ、紅白のお祝い贈答セットとして高値で販売される等徐々に普及してきている（写真11）。

以上、農研機構における国産食材開発の取組の一端について、品種を中心に紹介してきたが、まだまだ特徴的な品種は多数ある。おすすめの品種については農研機構のホームページでも紹介している。是非、ご覧頂きたい。

http://www.naro.affrc.go.jp/project/results/research_digest/index.html

4. 今後の課題－改めての「安定・多収」

戦後から現在まで、それぞれの時代の「食」への欲求に対応して、農研機構は新たな国産食材開発を続け国民の食卓を支えてきたが、近年、改めて「安定・多収」と

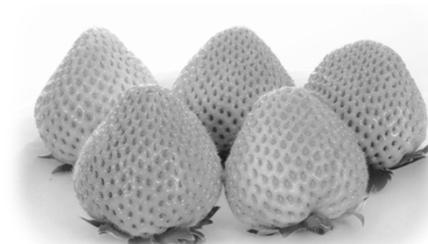


写真11 ピンクの果実でモモの香り「桃薫」

いう要素の重要性が高まりつつある。地球温暖化等によって引き起こされる新たな問題の発生に起因するものである。

温暖化の実際の現れ方としては、直線的に気温が上昇するのではなく、記録的な猛暑が襲ったかと思うと、時季外れの低温になったり、干天が連続したと思うと記録的な豪雨に見舞われる、というように、気象変動幅が大きくなるものと思われる。今年発生した北米における大豆やトウモロコシの記録的な不作に見られるように、国際的にも食料の需給は逼迫している。

今後は、変動の激しさの中でも安定して収量が得られるような「強い」品種の育成が求められることになる。あるいはまた、TPPへの加入問題にも見られるように、一層の国際化の中で、より低価格での供給が求められ、そのためのコスト低減に向けてという、新たな意味での多収品種や低コスト・多収技術の開発の必要性も高まっている。

冒頭に掲げたように、農研機構としても、第3期中期計画において、食料の安定供給のための研究や、地球規模の課題に対応する研究を大きな柱として研究を進めることとしており、新たな段階での「安定・多収」品種の育成や技術開発によって日本、そして世界に貢献して参りたい。

注) 品種（ ）内の数字は、品種登録出願し公表された年です。

ヘルシンキでの国際図書館連盟 (IFLA) 総会と サテライト会議に参加して

An Introduction to the World Library and Information Congress (IFLA 2012) and the Satellite Meetings

長塚 隆*

国際図書館連盟 (IFLA) の 78 回目の大会と総会が、2012 年 8 月 12 日から 16 日まで、フィンランドのヘルシンキで開催され、世界各国から図書館員、図書館員教育に携わる教員、出版社や図書館ソフトウェアなど図書館に関係する企業など、3,000 人以上の幅広い人が集まり、図書館の現状と将来に関する多くのテーマで研究発表、事例報告、書籍や図書館システムなどの展示会が行われました。

今年の国際図書館連盟 (IFLA) 78 回大会は、図書館が時代の進展に対応してどのように変革してゆけばよいかを問われている時期を象徴するように、“Libraries Now! – Inspiring, Surprising, Empowering” (図書館の今! – 奮起、驚き、力) のテーマで開催されました (写真 1)。



写真1 IFLA 大会会場：ヘルシンキ・コンベンションセンター

8 月 12 日 (日) の開会式には、広い会場がいっぱいになるほど、世界の各国から多くの参加者がありました。

日本からは約 30 名が参加しました。

開会式では、ノルウェーの大会実行委員長による大会参加への歓迎挨拶に続いて、イングリッド・ペアレント (Ingrid Parent) 会長から昨年の大会以降の報告と今回のヘルシンキでの大会の準備を担当したフィンランド準備委員会の方への感謝が述べられました。その後、開会式では、フィンランドの音楽家によるピアノ演奏などによる歓迎が行われました。

イングリッド・ペアレント会長による開会の挨拶は、“Libraries – A Force for Change: Inspiring, Surprising, Empowering” 「図書館 – 変化への推進力: 奮起、驚き、力」のテーマで行われました (写真 2)。このテーマは会長としての自分自身のテーマでもあるが、本大会のテーマでもあることが述べられたあと、人種、宗教、年齢、言語などに関わらず図書館は社会のすべての人が情報にア



写真2 IFLA 会長より開会挨拶

* 鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科 〒230 - 8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3 tel 045-580-8143

Takashi Nagatsuka, Dept. of Library, Archival and Information Studies, Tsurumi University Tsurumi 2-1-3, Tsurumi-ku, Yokohama, Japan 230-8501 nagatsuka-t@tsurumi-u.ac.jp http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/nagatsuka_lab

クセスするための中心であり続けること、人々の研究や学習、あるいは楽しみとしての読書などのための場であるばかりでなく、図書館は市民間や隣人同士の社会的な対話や交流を促進することで、生活を文字通りに変革してゆくことが出来る場でもあることが強調されました。

さらに、デジタル化が進行する中で電子書籍やデジタルコンテンツなどの図書館での利用や保存にあたってデジタル著作権の在り方を検討してゆくことが世界の図書館にとって急務になっており、世界知的所有権機構(WIPO)に対して、図書館での電子書籍やデジタルコンテンツなどの利用や保存にあたって、著作権の制限の適用を要望して行くことが求められていると述べていました。

会長として、この4年間で国際図書館連盟の活動を進めてゆくため新たなプログラムを展開してきました。変化の時代において最も大切なものは、その中心は図書館員の間での共同を発展させることであると強調されました。

フィンランドは人口の割には国土が広いので移動図書館の活動が盛んなようです。大会会場の前にある広場では、毎日のように、バスを改良した様々な移動図書館の



写真3 会議のレセプション周辺



写真4 自転車による移動図書館

ほかに、左下の写真に見えるような自転車による移動図書館も展示されていました(写真4)。

国際図書館連盟(IFLA)では、分野やテーマごとに多くの常設委員会が設けられています。現在、私は「アジア&オセアニア地区常設委員会」の委員をしています。大会の開催に合わせて、委員会が開催され、各国から選出された委員が集まり、昨年の活動のまとめを行い、来年度の方針などについて、検討を行います。

また、大会では、多くの分科会に分かれて、テーマごとに、各国での調査や研究結果の報告が行われます。私は、「アジア&オセアニア地区」の分科会と「発展途上国での教育とトレーニング」の分科会とで発表を行いました。

“Innovative libraries: transforming our communities”(革新的な図書館: コミュニティを転換する)と題して「アジア&オセアニア地区」分科会が行われました。私は、“A Critical Role of Academic Advisory Service in a part of the Learning Commons Facility”(ラーニングコモンズの機能のひとつとしての学習アドバイザーサービスの役割)と題して、鶴見大学図書館での大学院生の学習アドバイザーによる学部学生の学習支援に関する活動を報告しました(写真5)。

「発展途上国での教育とトレーニング」分科会では、“Improving Library Use by Tsurumi University Students: A Collaborative effort among Educators, Librarians and



写真5 「アジア&オセアニア地区」の分科会での発表する筆者

Students” (鶴見大学学生による図書館利用の改善のために：教育者、図書館員、学生による共同による) と題して、鶴見大学ドキュメンテーション学科での司書養成に向けた科目での授業を、図書館と共同し、図書館員へのインタビューや報告会などを授業に盛り込んで、様々な図書館サービスを実際に授業中に体験できるプラクティカル・エクスペリエンス (practical experience) を取り込んだ授業の取り組みについて報告しました (写真6)。



写真6「発展途上国での教育とトレーニング」の分科会での発表後のディスカッションで登壇、筆者 (左)

8月12日(日)から16日(木)まで5日間にわたり、数多くのテーマ別分科会、図書館に関係する企業や団体による展示会やポスター発表などが行われました。そのうちで、デジタル化への対応などについて検討された分科会を中心に紹介します。

社会のデジタル化の進展に対応して、“Open access and digital resources” (オープンアクセスとデジタル情報源) のセッション、“Crisis? What crisis? The use of statistics and data for libraries at a turning point — Statistics and Evaluation” (危機、何が危機か? 転換期にあたり図書館のための統計とデータの利用 — 統計と評価分科会主催)、“Innovation in resource sharing: new methods, new technologies — Document Delivery and Resource Sharing” (情報源の共有における革新：新たな方法と技術 — 文献提供と情報源の共有分科会主催)、“Marketing of rare and special collections in a digital age — Rare Books and Manuscripts” (デジタル時代における貴重コレクションのマーケティング — 貴重書とマニスクリプト分科会主催)、“Information literacy meets E-learning: let's talk about interconnections and outcomes — Information Literacy with E-learning Special Interest Group” (情報リテラシーとeラーニング：相互接続と成果について — 情報リテラシーとeラーニングスペシャルインタレストグループ

主催)、“Generation Google needs us: new roles for visibility in the digital age for information & reference services — Reference and Information Services” (Google世代にとっても図書館員が必要：デジタル時代における情報・参考サービスの可視化のための新たな役割 — レファレンスと情報サービス分科会主催)、“The role of libraries in data curation, access and preservation: an international perspective — Science and Technology Libraries” (データの収集、アクセス、保存のための図書館の役割：国際的な視点 — 科学・技術図書館分科会主催)、“The influence of new developments of information technology on professional development in libraries — Information Technology with Education and Training” (情報技術の新たな発展による図書館員の専門性の深化への影響 — 情報技術と教育・トレーニング分科会主催) など様々な視点からの方向が行われました。

農学図書館に関心のあるグループ (Agricultural Libraries Special Interest Group) は、“Social networking for agricultural research, education, and extension service: an international perspective” (農業研究、教育、エクステンションサービスのための社会的なネットワークの構築：国際的な視点から) のテーマで分科会を開催しました。分科会の発表では、各国でのソーシャルネットワークサービスやブログなどの活用について報告されました。

8月16日(木)には閉会式が行われ、今までの国際図



写真7 閉会式で、IFLAの活動への顕彰後のスピーチ

書館連盟 (IFLA) の活動に大きな貢献が会った人が顕彰されました。上の写真で顕彰へのお礼の挨拶をしているのは、OCLCのJordan社長です (写真7)。また、来年の国際図書館連盟 (IFLA) の大会の開催国であるシンガポールから、来年の8月17日-23日に開催される大会に多くの人々が参加して、大会を盛り上げてほしいとの挨拶がありました (写真8)。



写真8 来年（2013）の開催国シンガポールからの挨拶

IFLA 大会では研究・事例発表と同時に、図書館に係る展示会企業や団体が製品を紹介する展示会が開催され、世界各国の図書館に関する新しい動きを理解するのに有益な場となっています。

フィンランドのトゥルク大学での「図書館での統計データの活用」の会議に参加して

フィンランドのトゥルク大学 (University of Turku) で8月8日(水) - 9日(木)に、「図書館の運営や経営にあたっての統計データを活用した評価や方法」についての会議に参加しました。この会議は国際図書館連盟のサテライト会議として開催されました。トゥルクはフィンランドの首都であるヘルシンキからスウェーデンに向かって列車で2時間ほどのところにある人口17万人ほどの町です。トゥルクはヘルシンキの前にノルウェーの首都であった歴史のある町です。

会議は、トゥルク大学の図書館の入っている大きな建



写真9 図書館、学生食堂、教室、教員研究室が入っている建物：会議場

物で、開催されました(写真9)。こちらでは、長い冬の寒さが影響しているのかもしれませんが、大きな建物に、図書館、学生食堂、教室、教員の研究室などすべて一緒の建物になっています。

会議では、統計データや様々な指標を有効に活用して、もっと、図書館の大切さや重要性について具体的にアピールできるのではないかとということで、事例が紹介されました。今後、日本の図書館でも、もっと統計データの活用に取り組む必要がありそうです。

エストニア・ターリンでの「メタデータ」の会議に参加して

バルト3国のひとつであるエストニアのターリンで、8月17日(金) - 18日(土)に「デジタル環境におけるサブジェクト(主題)・メタデータとセマンティックウェブ」についての国際会議が開催され参加しました。エストニアの首都であるターリンは、フィンランドのヘルシンキからフェリーで2時間ほどの対岸にあります。旧市街は、古い中世の時代の建物や街並みが残る落ち着いた町です(写真10)。

会議は、国立図書館が修理中ということで、近くのホテルで開催されました。会議では、各国での主題メタデータへの取り組み状況や、ビジュアル資源へのメタデータの付与、多言語索引、地理・空間情報の付与、多文化、多言語資料での分類システム、主題へのアクセスへのフォークソノミーの利用など、多面的な発表が行われました。



写真10 ターリンの旧市街

花き病害の診断防除データベース（花き病害図鑑）

Web site “A Pictorial guide for flower diseases in Japan”

築尾 嘉章*

1. はじめに

花き類は野菜の10倍以上の種類があるため、発生する病害の種類も野菜に比べ遙かに多い。ところが非食用ということもあり、病原菌が何で有るとか（同定）、どのような防除法があるかについては取り組まれずに放置されていることが多く、現場では対応に苦慮している。病原菌の分類・同定は菌の形態・培養特性等に基づく方法が一般的であるが、これには高度な専門知識を必要とし、かつ時間がかかるという欠点がある。しかし最近提唱された分子診断の手法を用いれば、大幅に労力を削減した迅速かつ正確な病原菌同定を行うことができると考えられる。しかし分子診断の手法は発展途上であり、現状ではすべての菌類について確立してはいない。そこで本研究では分子診断を先に行い、次いで従来の手法で検討して両者の整合性を確認することで、未同定病害を迅速診断するスキームを確立することを第一の目的とした。次に得られた結果と他の付随する病害情報を加え、総合診断・同定システムとしてデータベース化しウェブで公開することを第二の目的とした。

今回紹介するウェブサイト「花き病害図鑑」は上記の目的で平成18年～20年に実施した農林水産省実用化技術予算「花き類病害の双方向型総合診断・防除システムの開発および公開」の成果の一つである。

本研究の参画機関は岐阜大学流域圏センター、北海道立花・野菜技術センター、青森県農林総合研究センターフラワセンター21あおもり、山形県庄内総合支庁農業技術普及課・山形県農業総合研究センター、千葉県農業総合研究センター暖地園芸研究所、東京都農林総合研究センター、静岡県農林技術研究所、大阪府環境農林水産総合研究所及び福岡県農業総合試験場（名称は当時）の

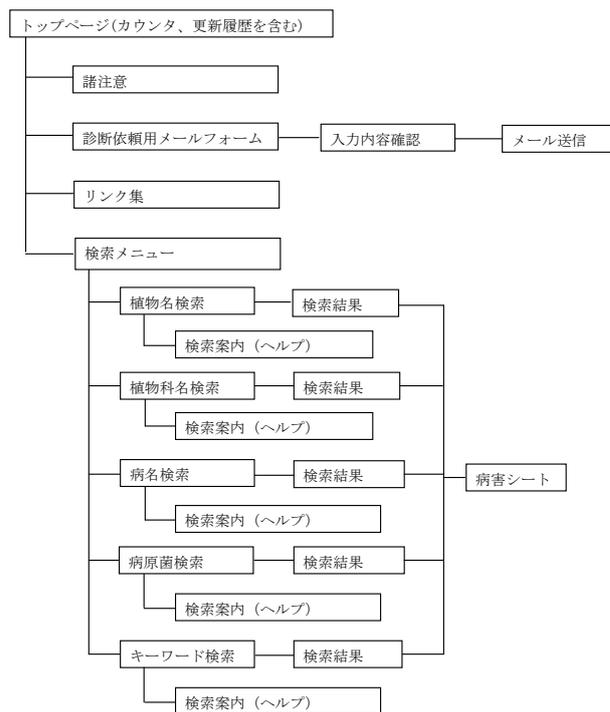


図1 一般検索サイトの構成

10機関で、農研機構花き研究所が中核機関を果たした。これまで花き病害図鑑は印刷体では日本植物大事典(6200種収録、花きだけでなく国内の全植物を扱う。)を始め数冊の単行本が出版されているが、大部で検索が難しかったり掲載される写真が紙幅の関係で数点に限られる等の制限があった。ウェブ版病害図鑑ではウェブの特徴を生かして掲載写真を多数挿入することが可能であるし、随時の追加掲載や修正が容易である。本ウェブでは平成24年9月現在で238種類の花きの各病害を3,360

* 独立行政法人 農業・食品産業技術研究機構 花き研究所 〒305-8519 茨城県つくば市藤本2-1
Yoshiaki CHIKUO NARO Institute of Floricultural Science, NIFS, 2-1 Fujimoto, Tsukuba, 305-8519, Ibaraki, Japan.

枚の写真で紹介している。花きの総種類数に比べるとまだ十分とはいえないが、それでもかなりの種類を網羅しているといえる。

2. ウェブサイト「花き病害図鑑」の紹介

本ウェブサイトは広い意味の花きに含まれる植物の病害（一部生理障害なども含む）写真を全参画研究機関が持ち寄り解説文などを添付して共同で制作したものである。システム自身の構成・作製は（株）茨城ソフトウェア開発株式会社（現アクモス）に依頼した。

検索の仕方としては「植物名検索」、「植物科名検索」、「病名検索」、「病原菌名検索」および「キーワード検索」の5種類がある。本ウェブサイトの基本構成図を図1に示す。一般に植物の病気の名前を調べるときは植物自身の名前はわかっていることが多いので、まず植物の名前から検索する。

1) 植物名検索

植物名検索を選択するとア行からワ行までの欄が現れるから任意の行を選択する。たとえばバラを調べたい場合、ハ行なのでこれを選択するとハ行に属する植物名が列記される（図2）。するとバラまたはバラ類があるのでここを選択すれば、掲載されている病害のサムネイル13件が一覧される（図3）。ここから調べたい病害を選択する。調べたい病気が斑点性の病害であればサムネイルの写真から黒星病、べと病、斑点病の3点が候補となる。それぞれを閲覧して可能性の高い病害を選べば、いわば絵合わせでもある程度、当該病害を類推できる。ここでは黒星病の解説シートを掲載する（図4a, b）各病害のシートには病原菌の学名、所属、別名（ある場合）、病徴の解説、発病時期、場所、防除方法、引用文献、著者が記載されている。また複数の病徴写真（あれば）と共に病原菌の顕微鏡写真（病原菌の有性、無性繁殖器官、耐久器官など）もできるだけ掲載したので、調べたい病害を確定するのに便利である。また外部サイトとして日本植物病理学会・農業生物資源研究所編日本植物病名データベースともリンクしている。以上の各病害のシートはA4版1～2枚に印刷できる。なお写真については各自が持ち寄ったのでそれぞれの写真にクレジットを重ねて転用時の著作権に配慮している。



図2 植物名検索の例 ハ行



図3 植物名検索の例 ハ行 バラ

2) 植物科名検索

調べたい植物の科名がわかれば近縁の植物の病害も調べることができる。アルファベット順に並んだ項目から目的の科を選択するとその科に属する植物名が表示される。ここから先は植物名検索と同じである。なお寄主植物の分類は新エンabler方式によっている。

3) 病名検索

病名からも検索が可能で、この場合は手入力することになる。たとえば「うどんこ病」と入力すれば69種類の植物のうどんこ病のサムネールがシート4枚に渡って表示される（図5）。ただし、カタカナ入力では該当なしになるので注意。ここから個別の画面に移っていくと情報が得られる。

4) 病原菌名検索

病原菌の学名がわかっている場合に使用する。入力はアルファベットによる。Pythium（ピシウム）属菌による病害を調べる場合、アルファベットのPの項目をクリックすればParaphytopusからPythiumまでの病原菌学名が表示される（図6）。この中からPythiumをクリックすれば29種類のPythium属菌による病害のサムネールが表示される（図7）。ここで表示されたサムネールからピシウム病が苗立枯症状を起こす病害であることが見て取れる。

5) キーワード検索

任意のキーワードを入力すればそれに該当する病害のサムネールが表示される。キーワードは30文字以内。複数のキーワードを指定する場合は、半角スペースで区切る必要がある。検索はAND検索が可能である。検索でヒットし易いように複数の読みのある用語などはそれぞれ入力してある。たとえばピシウム、ピシム、ピチウムのいずれでもヒットする。

3. 双方向型

本ウェブサイトでは閲覧者からの病害鑑定依頼も受け付けている。この場合は一旦「診断をお受けします」ボタンから入り名前、住所等連絡に必要な項目と問い合わせ内容を入力してもらおうと管理者側から再度メールアドレス等を連絡するという二度手間を行っている。これは当ウェブサイトが公的機関のウェブサイトであるため、質問メールに紛れて、迷惑メールや悪意のある攻撃を防ぐためである。基本的には栽培農家やそれに類するもの

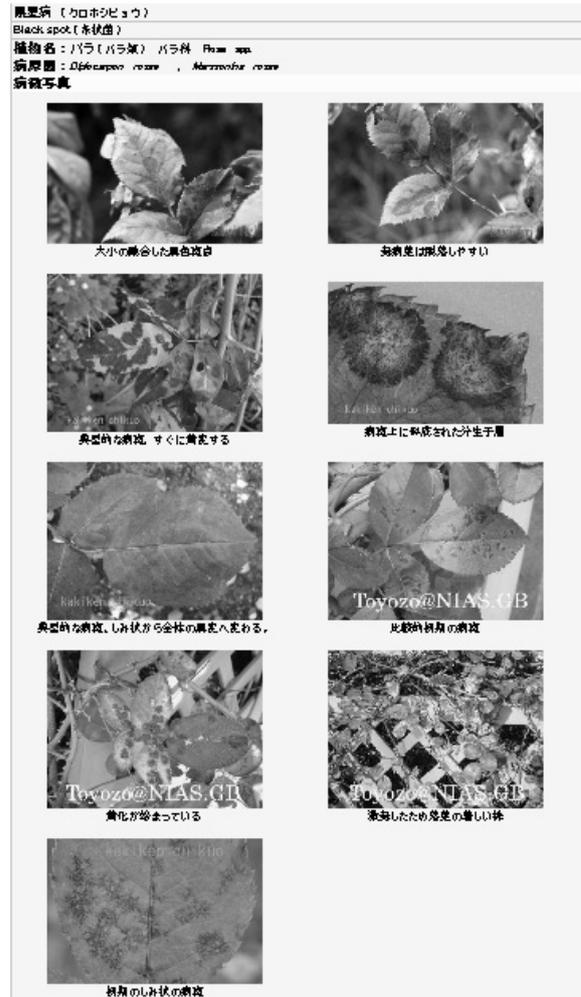


図4a 植物名検索より 黒星病を検索

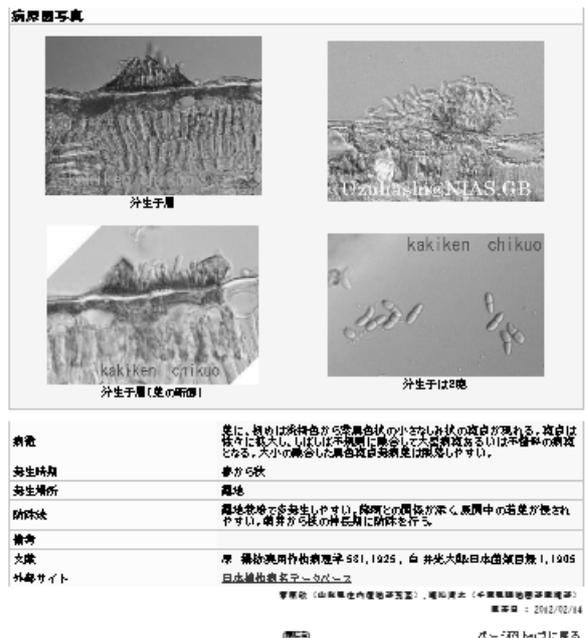


図4b バラ黒星病の解説シート

からの質問が対象で、一般の家庭園芸者からの質問が大量に来ると本業に差し障りがあるので若干ハードルを高くしてある。

4. ウェブサイトの管理

本ウェブサイトは農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所内のバーチャルラボ内にサーバーを設置している。サーバは、情報総合センターの情報通信共同利用館（電農館）に設置されており、基本的な設定（OSは

基本的に CentOS）・管理は情報総合センターで行ってもらっている。本ウェブサイトへのアクセス件数は開設以来、44,715件（2012年8月27日現在）あり、全国の農業改良普及員や防除所などで有効に利用されているものと信ずる。現在では農業生物資源研究所病名目録データベースとの相互リンクも完了し、より使いやすい図鑑へと改良が重ねられている。本プロジェクトに参画した研究機関はそれぞれ IP アドレスを所有しており、随時管理者サイトから本体の改訂、修正が可能となっている。

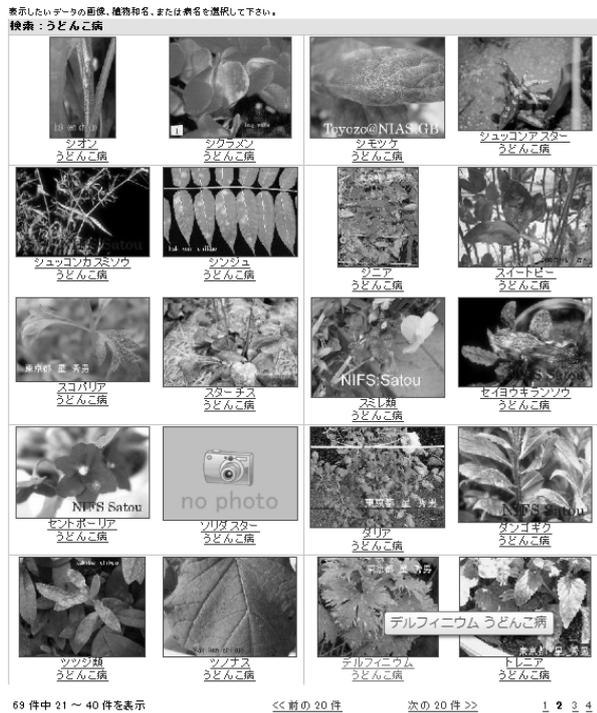


図5 病名検索の例 うどんこ病

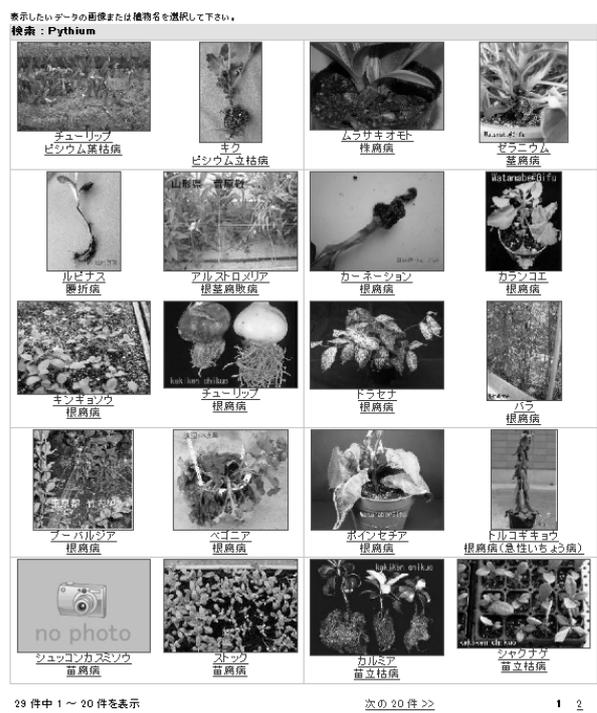


図7 病原菌の学名からの検索 Pythium (ピシウム)

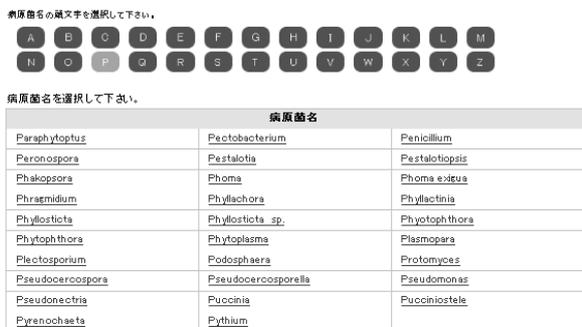


図6 病原菌の学名検索 P行 Pythium の例

コンテンツソリューション： サンメディア48年の歩みとサービスのご紹介

Content Solutions : The 48 years history of Sunmedia and our products

松下 茂*

1. サンメディアの歩み

弊社は2014年に創立50周年の節目を迎えます。創立した1964年は高度経済成長期にあり、東京オリンピックの開催、東海道新幹線の開通、本格的な高速道路の名神高速道路が開通した活気ある年でした。また研究開発型企業の発展も著しいものがあり、研究や技術開発に必要な文献の需要が高まっていました。そのような中で、弊社は我が国で最も古いドキュメントデリバリサービス企業として誕生し、創立時からJICST（日本科学技術情報センター：現、独立行政法人科学技術振興機構）や国立国会図書館の協力を得ながら、学術文献情報の流通を担ってきました。また国内のリソースに限らず、早くからBritish Libraryなどの海外の図書館との提携も図ってきました。創立当初は現在のように簡単に複写できる機械がなかったのでカメラと三脚が複写機の代わりでした（写真1）。



写真1 創業時に利用したカメラと三脚

80年代初頭からのオンライン検索システムの発達の中で、弊社はいち早くオンライン代行検索サービスを開始しました。また同時期に、国内で著作権管理団体が誕生する以前より、著作権解決済のマイクロフィルムからの文献複写サービスやその後のADONISを利用したドキュメントデリバリサービスを担ってきました。当時のお客様の多くが研究開発型の企業であったことは、文献情報を通じて経済成長を支えてきたというささやかな弊社の自負を生んでいます。

90年代に入ると二次情報データベースがCD-ROMで提供され始める中で、その販売と利用者講習などにも力を割いてきました。さらに、インターネットが本格的に利用され始めて以降は、インターネットで利用できる電子ジャーナルやデータベースの販売を手掛けるようになり、大学図書館とのお取引も増えてきました。

97年には、弊社が総代理店を務めたProQuest Medical Libraryというアグリゲータ系フルテキストデータベースを核とした日本医学図書館協会のコンソーシアムが成立しました。このコンソーシアムは日本の大学で成立した最初の電子ジャーナルコンソーシアムであり、現在も継続しています。

2000年以降は、増える電子リソースの効率的な管理やデータベース検索結果等の文献情報管理、著作権許諾代行サービス、インデキシングや文献評価などのエキスパートサービスなどを事業として展開しています。

また、国内学術雑誌の電子化と利用を目指して、PierOnline（ピアオンライン）という自前の電子ジャーナルプラットフォームからのオンラインサービスを提供

* 株式会社サンメディア 〒164-0012 東京都中野区本町3-10-3 PORT91

Shigeru MATSUSHITA Sunmedia Co., Ltd., PORT91 B;ulid.3-10-3 Honcho Nkano-Ku Tokyo 164-0012 Japan

しており、創立当初のドキュメントデリバリーサービスから新しいビジネスコンセプトを持つ企業として成長しようとしています。弊社のビジネスポリシーは以下です。

ビジネスコンセプト：

コンテンツソリューション (Content Solutions)

ビジネスミッション：

学術情報の制作・流通・提供を通じて科学技術と文化の発展、社会進歩に貢献する

コーポレートカルチャー：アクア

(AQUA : Appreciation, Quality, Usability, Activity)

弊社の歴史の詳細は別稿をご参考頂くこととし⁽¹⁾、本稿では主に大学図書向けのユニークなサービスについて紹介することとします。

2. ウェブスケールディスカバリーサービス「Summon」(サモン)

Summon⁽²⁾は、統合検索やOPACを超える全く新しい学術情報分野での検索サービスです。最近では、研究者であっても専門のデータベースを利用しないで、GoogleでWeb上の学術情報を検索する傾向が強まっているようですが、その検索結果は必ずしも有用なものばかりではなく、また図書館が契約したり所蔵している資料を探した結果でもありません。

SummonはGoogleのようなシンプルなインターフェイスを通じて、図書館の持つ資料も含めて広範で信頼性の高い情報をすばやく探すことができます。

それは、Summonが図書館の持つ様々なリソースとオンライン上の学術リソースの両方のデータを搭載できるからです(図1)。その結果、利用者は簡単に信頼性の高い情報を得ることができます。データはあらかじめSummonサーバーにハーベストされているので、瞬時に検索結果が表示されます。

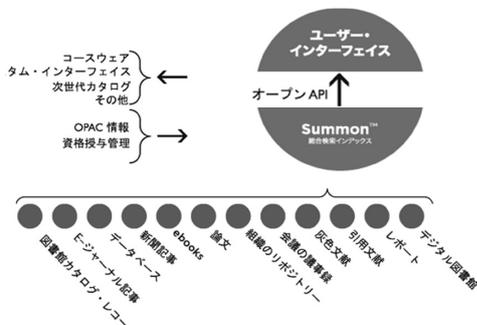


図1 Summonに収載されるデータ

Summonにハーベストされてインデックスされている学術情報は、SCOPUSやWeb of Scienceなどの二次情報をはじめとして、海外の電子ジャーナルのほとんどや国内のJSTAGEなどの電子ジャーナル、二次情報データベースなどが含まれており、レコード数は40億を超えています。また利用機関は、全世界で500機関を超えています。国内でも佛教大学様や九州大学様、東邦大学様などご利用の機関が増えてきています。

なお、SummonはSoftware as a Service(SaaS)として提供されるサービスのため、専用サーバーの設置やメンテナンス、アップデートなどの作業は必要ありません。

3. RefWorks : 学術情報・研究成果の収集と管理、共有、情報発信を支援

RefWorks⁽³⁾は、研究成果や電子リソースから収集した学術情報を蓄積・管理し、それらを共有したり、情報発信するためのウェブサービスです。利用者は、研究者だけでなく教職員、学生、図書館員など大学に所属する全ての人のニーズに対応できます。また欲しい情報をRSSを利用してRefWorksに収集することも可能です。

収集した文献情報は、RefWorks内で自由に編集して主題毎に管理することができます。また、論文執筆時には瞬時に参考文献リストを作成することができて、参考文献のスタイルが登録されていない場合は、自分で参考文献の書式を作成し登録しておくことができます(図2)。

収集した情報は、Web公開機能を使えば機関の業績集として公開することができます。

昨年には、インターフェイスも一新されてより親しみやすく使いやすいサービスとなりました。

RefWorksは現在世界で1200を超える機関が利用しており、国内でも東京大学様、京都大学様、慶應義塾大学

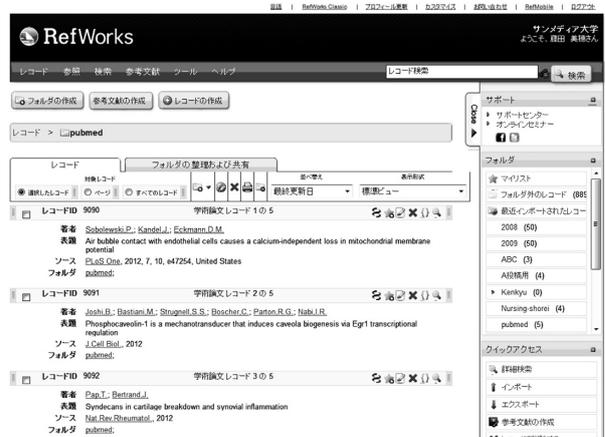


図2 RefWorksの文献管理画面

様、早稲田大学様などご利用いただいている機関は、50 機関近くになっています。

4. Faculty of 1000：最新の文献の評価や重要性がすぐに分かる

Faculty of 1000⁽⁴⁾は、研究者にとって必須の最新文献の評価がすぐに分かるサービスです。毎日新しい論文情報が大量に生まれていますが、その論文の中で自分に必要な論文や有用な論文を探し出すことは至難の業です。データベースを探しても入力したキーワードに関連した文献情報しか見つかりません。

Faculty of 1000 は、ちょうど同じ研究をしている同僚が「これ、読んだ?」「これ、すごいよ!」と教えてくれるのと同様に、最新文献の中からトップリサーチャーが論文を推薦してくれるウェブサービスです。

分野は Biology & Medicine で、Faculty メンバーと呼ばれる 4000 人以上の研究者が毎月有用だと判断した論文を評価します(図 3)。

評価は、



図 3 Faculty of 1000 の文献紹介画面

- All time Top 10

各カテゴリーで高い評価を受け得ている論文がリストかされたもの

- Current Top 10

前月からの 1 ヶ月間もっとも評価された論文リスト。評価は、F1000 Factoe によってスコアがつけられます。

- Most Viewed

毎日更新されて、14 日間の評価コメントが見られた回数がスコアとして反映されます。

- Hidden Jewels

まだ広く読まれていないが、重要で有用な論文の Top10 です。

5. その他のサービス

以上、弊社が扱う商品の中でユニークなサービスを紹介してきました。これら以外に、大学図書館向けの商品例を記載いたします。

- PierOnlin、MedicalFinder などの国内外の電子ジャーナル
- SerialsSolutions ブランドのリンクリゾルバー 360LINK や統合検索 360Search、360COUNTER
- ProQuest ブランドの各データベースや電子書籍の ebrary、
- 医中誌 Web、
- JDreamII、JDreamIII

上記に含まれない商品でも、ご遠慮なくお問い合わせください。皆様のご利用をお待ち申し上げます。

参考文献、参考サイト

- (1) 山下志信, それは三脚と小型カメラによる接写から始まった一わが国のドキュメントデリバリーサービスの原点一, 情報管理, Vol. 50(2007) No.12 P836-844
- (2) <http://www.serialssolutions.com/en/services/summon>
- (3) <http://www.sunmedia.co.jp/e-port/refworks/>
- (4) <http://www.sunmedia.co.jp/e-port/f1000/>

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所図書室

NARO Institute of Fruit Tree Science Library

1. はじめに

国の食生活指針において『野菜同様に果物も毎日摂りましょう、1人1日200g以上のくだものを摂取しましょう』という「毎日くだもの200グラム運動」があります。本稿の担当者もこの運動を実践していると自負する果物好きです。果物は店頭で感じられる「匂」がまだまだはつきりしていて、売り場でナシやブドウを見つける季節感もまた楽しみのひとつです。

つくばのナシは瑞々しく多汁で、初めて食べた時にナシのイメージが一変しました。後にそれらのナシは「幸水」「豊水」という品種だと知り、なるほど果汁たっぷりのナシに相応しい名前だと納得した経験があります。それらのナシの品種育成を手がけた独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所（以下、「果樹研究所」という。）図書室に今回、訪問する機会を得ました。

2. 果樹研究所とは

果樹研究所は明治35年に当時の農商務省農事試験場園芸部として静岡県興津に設置され、農林省園芸試験場として独立した後、昭和52年につくば市へ移転し現在に至っています。幾度かの組織変遷を経ているものの、

110年という長い歴史を持つ研究所です（写真1）。

主な研究対象は果樹の新品種育成、生産・流通・消費技術、防除技術であり、研究員も育種・栽培・病害虫の専門家が揃っています。

果樹研究所は本所のほか4箇所の研究拠点（盛岡、興津、安芸津、口之津）があり、本所ではナシ・クリ・モモ・ウメ・スモモ・アンズ、盛岡ではリンゴ、興津・口之津ではカンキツ、安芸津ではブドウ・カキとそれぞれ特色のある育種圃場を有しています。

品種育成と併せて果樹技術者の養成にも取り組まれており、基礎的・応用的な学理講習や生産現地研修など2年間の研修制度が設けられ、これまでに三千人以上の修了者があり、皆さん果樹産業で活躍されているとのことでした。

3. 図書室の概要

研究活動を支える図書館は、明るく気持ちの良い図書室でした（写真2）。

2001年に花き研究所が隣設されてから花き・園芸分野の図書室機能を兼務することになり、花き研究所の発足当時から図書委員会は合同開催し、また、花き研究所



写真1 果樹研究所玄関



写真2 図書室カウンター

が発足した際行われた書架等の拡張に伴う改装の新しい雰囲気はまだ残っていました。

本所に設置されている情報広報課は課長、課長補佐、情報管理係、広報係の職員各1名(計4名)のほか、図書担当、広報担当の契約職員各1名(計2名)の合計6名体制でした。情報広報課は所内のLAN管理・WEBサイト管理・刊行物等の広報業務も行っていることから、図書管理業務に携わっている人員としては、職員、契約職員合わせて約1.5名でした。

また、4カ所ある研究拠点にも資料室はあるものの専門職員は配置されていない所もあり、文献複写業務については本所で一括対応しています。

職員は24時間利用可能で、基本的にセルフサービス、貸出手続きは専用端末で行っていました。

図書室は一般にも開かれており、複写(有料)と閲覧が可能です。一般来館者向けの利用案内は果樹研究所のWebサイト

(<http://www.naro.affrc.go.jp/fruit/introduction/library/index.html>)

から確認することができます。

研究拠点も含めると図書および資料の蔵書数約39,400冊、雑誌所蔵誌数1,582誌。図書委員会を年に数回開催し、研究者の意見を反映した運営を心がけているとのことでした。

雑誌については数年前まで冊子体維持の傾向が根強かったようですが、研究拠点～本所間の研究環境の拠点間格差を無くしたいとの意見を受けてオンラインジャーナルの導入が進められました。しかし、研究拠点を持つ特有の問題として、オンラインジャーナルは実際の利用者は少なくとも1サイトとしてカウントされるため、専門分野によっては購読料が割高になってしまうことが挙げられました。

また、年々増え続ける資料と、研究分野によっては古

い文献の保存を要望する声があり、廃棄資料の選択が難しいことから、書架スペースが逼迫していることも現在の課題とのことでした。その対策のひとつとして、実験棟に資料庫を保有し、オンラインジャーナルで読めるタイトルはその資料庫に保存されています。

毎年4月には新規採用者、研修生の受入もあることから、図書館の利用案内も含めた初心者セミナーが実施されています。研修生の図書館の利用も多く、図書担当職員が研修生を「1年生、2年生」と親しんで呼んでいる様子は印象的でした。電子化の状況についてお伺いしたところ、機関リポジトリは将来的な課題としており、現在は刊行物の電子化を進めているとのことでした。

4. 図書室の様子

工夫を感じたのは新着雑誌コーナーです。閲覧台を挟んで配置された雑誌架が4つに仕切られており、それぞれの区画の見出しに展示開始から何週間目であるのか表示されていました。

担当者は、新着雑誌を1つの区画に1週間受け入れ展示を行った後に、見出しカードのみを毎週移動する。このように新着雑誌の雑誌架を移動しないで、受入後何週目の資料なのかを明示することは新着雑誌の探索に何週まで遡ればよいか分かりやすく探索時間を短縮し、資料を素早く見つけることができます。新着雑誌は展示開始から4週間を過ぎると閲覧室内に1年間保存する一般書架に移動されます(写真3)。

閲覧制限資料についての配置も工夫されており、電動式移動書架の一角を移動書架そのもののロック機能を用いて閉架として利用し、配置されていました。担当者以外は操作できないように制限されており、限られた書架スペースを機能的に工夫した図書・資料管理だと思いま



写真3 新館雑誌架



写真4 果実写生図

した。

震災後の書架の地震対策としては、本棚用の滑り止めテープが導入されていました。落下防止バーは移動書架内では幅をとるため利用できず、棚の本を移動するなどして徐々にスタッフの手作業でテープ貼り整備が進められていました。

図書室入口のすぐ横に貴重書のコーナーが設けられており、和装本や果実を写生した図画資料などが展示・保管されていました。このうち『果実写生図』を閲覧させていただきましたが、品目・品種別に表皮や断面図、種

の細部まで素晴らしく緻密に描写された見応えのあるもので、果樹研究所の歴史の一部を感じることができました（写真4）。

お忙しい中にも関わらず、新谷情報広報課長（平成24年10月より農研機構畜産草地研究所情報広報課長）、勝山課長補佐、小林情報管理係の3名にご対応いただきました。丁寧にご説明、ご案内いただき大変ありがとうございました。

（文責：石井馨、平山立夫）

平成 24 年度第 3 回理事会議事録

日 時：平成 24 年 7 月 31 日(火)

18 時 30 分から 19 時 30 分

場 所：農図協事務局

出席者：長塚（会長）、田沼（事務局長）、平山理事、
木村理事、高橋理事、三井理事、尾崎理事、
上田（事務局）

(審 議)

1. 会誌編集の追加企画について

平山委員長より、次号（168 号）に農研機構の朝倉氏が「国産食材について～新品種を中心に～（仮題）」を投稿したいとの発言があり、了承された。また、セミナー・見学会の実施時期の関係からセミナー記事（食品と放射能）は 169 号に移行することとし、併せて、見学会参加者の感想文を募集し掲載することとした。なお、いまだきデータベースの候補記事は引き続き検討することとした。

2. セミナー・見学会の進捗状況について

永島理事（欠席）より、見学先の明治大学和泉図書館の入館状況等が文書報告され、三井理事からは、セミナー・見学会の実施日（11 月 8 日(木) 13:30 より）およびセミナー講師が(独)農研機構 食品総合研究所食品安全研究領域長川本伸一氏となったとの報告があった。また、参加募集を早期に行うこととし、宣伝用チラシ作成は三井理事が行うこととした。

3. HPの改善について

三井理事より、HPのトップページの改善案の提案があり、検討の結果、基本的に了承された。なお、書棚の絵柄を縮小すべきとの意見があった。

(主な取組み)

1. 平成 24 年度第 3 回理事会

日 時：平成 24 年 7 月 31 日(火) 18:30 ～ 19:30

場 所：農図協事務局

出席者：長塚、田沼、平山、木村、三井、高橋、尾崎、
上田

議 題：1. 当面の取組みについて
2. その他

2. 平成 24 年度第 1 回セミナー委員会

日 時：2012 年 9 月 29 日(土) 10:30 ～ 12:00

場 所：農図協事務局

出席者：永島、三井、尾崎、田沼、上田

議 題：1. 11 月開催のセミナー・見学会の宣伝・
運営
2. JST 要望のセミナー開催について
3. その他

(編集委員)

委員長	平山 立夫	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構
委員	木村 博	特定非営利活動法人日本医学図書館協会
	高橋 伸弘	独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所
	石井 馨	農研機構食品総合研究所
事務局	田沼 繁	特定非営利活動法人日本農学図書館協議会

会員頒布

日本農学図書館協議会誌 168号

2012年(平成24年)12月1日発行

発行人 長塚 隆

編集・発行 特定非営利活動法人日本農学図書館協議会

住 所 〒114-0014 東京都北区田端 3-13-2
谷中田美術第2ビル 2F

TEL&FAX 03 (5834) 2840 e-mail : jaald@nifty.com

URL : <http://jaald.ac.affrc.go.jp>

印刷所 (有)工房 GAO 東京都文京区本郷 2-40-13-604

ISSN 1342-1905

